

イチジクの高主枝栽培による凍害抑制と熟期促進

本県イチジクの主要品種である「柵井ドーフィン」は、凍害に弱いことが知られている。このため凍害対策として高主枝の樹形に仕立てたところ、発芽率の低下や発芽遅延が回避されるとともに、収穫時期が早くなり初期収量が優れることを明らかにした。

内容

当センター内の主枝高1.8m、1.2m、0.6m（慣行）の「柵井ドーフィン」（2001年3月定植、栽植間隔2.0m×2.0m）を用いた。主枝高1.8m、1.2mでは新梢を斜め上方に、0.6mでは上方に誘引し、いずれの主枝高とも新梢の間隔を片側40cmとした。冬期には凍害回避のため、各樹の主枝と主幹に稲ワラを被覆した。各樹の発芽日（率）や新梢の長さ・節数を調査した。さらに成熟果を順次収穫し、結果枝1本当当たりの累積収量と果実品質を調査した。各節の着果日（果実の横径が約4mmとなった日）と収穫日を調査した。

その結果、主枝を高くすることにより発芽率の低下や発芽の遅延が回避され、凍害の抑制効果が認められた（表）。また、新梢長が短く、節数が少なくなる傾向となり（データ略）、落ち着いた生長を示した。さらに、下位の1～5節で着果が優れるとともに、着果から収穫までの成熟日数は、

1～10節で短くなり早熟の傾向を示した（データ略）。さらに、結果枝1本当当たりの累積収量は、主枝が高いほど早くから増加し初期収量が優れた（図）。果実品質の点では、果実重や果汁の糖度に一定の傾向はみられなかったものの、果皮色はやや優れる傾向であった（データ略）。

以上より、主枝を高くすることで、収穫開始時期の前進が認められた。この原因としては、主に樹勢が落ち着いたことで、果実へ養分が多く分配され、生長が促進されたと思われる。

今後の方針

今後、従来の一文字整枝より主枝を高くした場合の新梢の誘引作業や、収穫作業の能率について検討する方針である。

松浦 克彦（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2424）

表 主枝の高さが発芽・展葉に及ぼす影響

処理区	発芽日	展葉日	発芽率(%)
1.8m	4月26日	5月7日	100
1.2m	4月26日	5月7日	100
0.6m	5月3日	5月17日	80

注)発芽率:5月28日時点

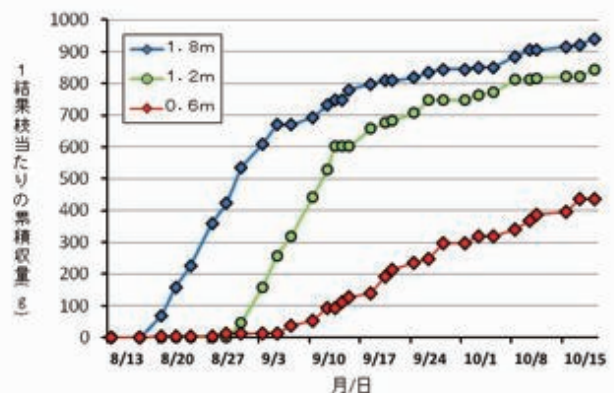


図 主枝の高さと1結果枝当たりの累積収量の関係（センター内、2012年）